

高校生英語学習者のリスニングおよびライ
ティング能力へのディクトグロス使用教材
の効果について

千葉浩彦（日本大学大学院博士課程前期）

英米文化学会第42回大会 2024年9月7日

於：日本大学通信教育部1号館

発表内容

1 ディクトグロスとは

(1) ディクトグロス

(2) ディクトグロスとディクテーションの違い

(3) ディクトグロスに関わる先行研究

2 リサーチクエスション

3 調査について

(1) 事前データ収集 (2) 実施期間 (3) 使用教材

(4) 参加者 (5) 実施方法 (6) 事後データ収集

4 結果

5 考察

1-(1) ディクトグロスとは

Wajnryb, R (1990)が提唱した技能統合型の活動

Grammar Dictation とも言い、本来は文法の定着を
目指したものの

ある程度まとまった英文を学習者に聞かせ、その英文を
復元させる学習法

1-(2)ディクトグロスとディクテーションの違い

ディクテーション (Dictation)

- a. 聞いた英語を一語一句書き取るトレーニング
- b. 当然のことながら1回ですべてを書き取ることはできないため、同じ音声を何度か聞くことになる
- c. リスニング力の向上に効果があると言われている
- d. 主として個人で行う活動

ディクトグロス

- a. 聞いた英文の知っている語（キーワード）を聞き取り、メモをする
- b. 聞ける回数は限定される（2～3回）
- c. 文法力、リスニング力、ライティング力に効果があると言われている
- d. ペア・グループワークで行う

ディクトグロスの手順 Wajnryb, R (1990)

1. 短めのまとまりのある文章を学習者にノーマルスピードで（2度）読み上げる
2. 英文が読まれている間に、学習者は知っている語句を書き留める
3. 小グループになって、学習者は自分が書き取ったものを持ち寄って、お互いに見せ合い、共有したもののから原文の復元をする
4. 文法的な正確性や文章の一貫性を目標とするが、原文を忠実に復元することをめざすものではない
5. さまざまな復元した文章が分析、比較され、学習者はお互いに精密に調べ、話し合いをして自分の英文をよりよいものにする

1-(3)ディクトグロスに関わる先行研究

前田昌寛.(2008).「ディクトグロスを用いたリスニング能力を伸ばす指導—技能間の統合を視野に入れて—」. STEP BULLETIN, vol.20, pp.149-165.

高校1年生を対象に20回にわたってディクトグロスを行った。

- (1)ディクトグロスを行ったクラスはリスニングの得点が伸びた。
- (2)波及効果としてライティング能力にも伸びが確認された。
- (3)文法能力に関しては誤りの少ない英文を産出することができるようになった。

久山慎也.(2014).「高校生の英作文力とリスニング力の向上におけるディクトグロスの効果」.STEP BULLETIN, vol.26, 146-158,

高校3年生、1つのクラスに、3か月間で15回のディクトグロスの指導を行った。

指導の前後で対象生徒の自由英作文の正確性・流暢性・結束性の変化を分析した結果、ディクトグロスは自由英作文の得点が低い生徒およびリスニングテストの得点が低い生徒に対して有効な活動であることが明らかになった。

2 リサーチクエストション

使用教材の違いによって、リスニング能力とライティング能力に影響が出てくるのではないか

①教科書で1度学習した英文の要約文を利用してディクトグロスを行う
→ (教科書組)

②初めて聞く英文を用いてディクトグロスを行う → (教科書外組)

①の場合には、英文がどのような内容なのかはおおよそ知っているので、top-down 処理（自分がすでに持っている知識を生かして内容を予測）が少なく済む。文を構築することに焦点を置く取り組みが予想されるため、ライティング能力の伸びが期待されるのではないか。

②の場合には英文の内容を理解しようとtop-down処理とbottom-up処理（細かく1つ1つを積み重ねて全体を理解すること）両方とも駆使しなければならないため、聞き取ることに焦点が置かれ、リスニング能力の向上が期待されるのではないか。

3 調査について

(1) 事前データ収集

- ・リスニング力の測定

英語検定試験問題：準2級から10題、2級から10題の合計20問
[前田(2008)、久山(2014)を参考]

- ・ライティング力の測定

100語程度の自由作文テーマ

「都会と田舎とどちらに住みたいか」

内容、語彙、文法、スペリング、使用語数を採点

(2) 実施期間

令和6年5月上旬から7月中旬にかけて英語の授業中に実施
(全10回) 1回あたり20数分

(3) 参加者

4年生大学進学を希望する普通科の高校3年生
74名 (37名×2クラス)

(4) 使用教材

1クラスは授業で使用している英語コミュニケーションⅢの教科書のページごとのサマリーを用いてディクトグロスを実施。実施前の授業内容としては、新出語の確認、本文のQA、本文の音読などであり、内容を理解したうえで行った。（教科書組）

もう1クラスは英語総合問題集から初見の英文を用いてディクトグロスを実施。生徒にとって未知語と思われる語を確認する以外は、特に事前指導は行わない。英文内容は前述の教科書よりはやさしめの英文を扱った。（教科書外組）

1回あたり70語前後の英文を使用。

(5)ディクトグロスの手順

生徒の実態を考慮して、甲斐(2009)や久山(2014)にならい、聞き取り回数は3回とした。

1回目は内容を把握するためにただ聞くことに集中する。

2、3回目でメモを取る。

聞き取りが終わった後は、まずは個人レベルで再構築を行う。

これ以上書けない段階に達したら、ペアになり、ペアで検討し、できるだけ完成させる。その際、原文と一字一句合わなくても、内容がほぼ同じであれば正解とすることを知らせる。

ペアで再構築が終わった後で、黒板に正解を提示（プロジェクターで投影）する。これを見て各自で、赤ペンで訂正し、提出した。

(6)事後データ収集

リスニングは事前調査と同じく英検の過去の問題を使用
(違う年度の問題)

ライティングは自由作文100語程度で書いてもらった。

テーマは「制服と私服ではどちらがよいか」

事前調査と同じ観点から採点

4 結果

事前テストと事後テストの結果を比較した

リスニングテストは英検準2級 10 問、 2 級 10 問で1つ1点

自由英作文テストは①内容 ②語彙 ③文法 ④スペリング・句読法の4観点から1～4点で採点。それぞれ3, 2.5, 2.5 2の重みづけにより、10点満点とした。また、流暢性の観点から書いた語数をカウントした

技能	下位項目
リスニング	準2級
	2級
ライティング	内容
	語彙
	文法
	スペリング・句読法
	使用語彙数

4 結果

これらを①組単位、各組の②上位者（各10名）と③下位者（各10名）に2元配置の分散分析（2要因・2水準）を行った。

	事前テスト	事後テスト
教科書組		
教科書外組		

①組単位での比較

リスニング能力

有意差なし

組単位での比較

$F(1, 55) = 0.26$

n.s.

事前事後での比較

$F(1, 55) = 6.06^*$

* $p < .05$ 主効果あり

(点数は下がった)

		平均	標準偏差
教科書組	事前	12.6	3.0
	事後	11.5	3.0
教科書外組	事前	12.2	2.1
	事後	11.2	2.9

ライティング能力
組単位での比較
事前事後での比較

有意差なし
 $F(1,55) = 0.72$ n.s.
 $F(1,55) = 0.02$ n.s.

		平均	標準偏差
教科書組	事前	11.52	1.60
	事後	11.59	2.13
教科書外組	事前	11.20	1.68
	事後	11.20	1.68

組単位で項目別の分散分析結果

ライティングのVocabularyで

両組とも事後に主効果あり $F(1, 55) = 6.12$ * $p < .05$

		平均	標準偏差
教科書組	事前	2.93	0.38
	事後	3.15	0.45
教科書外組	事前	3.00	0.52
	事後	3.13	0.43

2 組単位で項目別の結果

ライティングの語数で

両組とも事後に主効果あり $F(1, 55) = 11.46$ * $p < .05$

		平均	標準偏差
教科書組	事前	72.4	23.34
	事後	81.3	20.73
教科書外組	事前	76.5	21.93
	事後	83.9	17.65

②上位者での比較

リスニング能力 有意差なし

ライティング能力 教科書組に有意差傾向 $F(1,18) = 3.64 \dagger \dagger p < .10$

		平均	標準偏差
教科書組	事前	12.4	1.43
	事後	13.2	1.47
教科書外組	事前	11.8	1.33
	事後	11.8	1.33

上位者の項目別の結果
準2級リスニング

事前事後で両組に主効果あり $F(1, 18) = 5.92 *$ $*p < .05$

教科書外組の事後に有意差傾向 $F(1, 18) = 3.37 †$ $† p < .10$

		平均	標準偏差
教科書組	事前	7.3	1.2689
	事後	8.3	1.1
教科書外組	事前	6.4	1.4283
	事後	7.6	1.4967

ライティングでは

Vocabularyでは交互作用は有意ではないが、
教科書組で事前と事後に有意な差があった

$$F(1, 18) = 6.55 * * p < .05$$

		平均	標準偏差
教科書組	事前	2.9	0.3
	事後	3.3	0.4583
教科書外組	事前	3.1	0.5385
	事後	3.1	0.3

同じくライティング

Grammarで教科書組に有意差があった

$F(1, 18) = 14.78^{**}$ $^{**}p < .01$ 主効果あり

		平均	標準偏差
教科書組	事前	3	0.4472
	事後	3.2	0.6
教科書外組	事前	2.5	0.5
	事後	2.2	0.6

③下位者での比較

リスニング能力・ライティング能力ともに有意差なし

2 下位者

ライティングの項目別の結果

Vocabulary

両組の事前事後で有意差あり $F(1, 18) = 5.40$ * * $p < .05$

		平均	標準偏差
教科書組	事前	2.9	0.5385
	事後	3.1	0.3
教科書外組	事前	2.7	0.4583
	事後	3.1	0.3

2 下位者

語数

両組の事前事後で有意差あり $F(1, 18) = 8.38^{**}$

$^{**}p < .01$

		平均語数	標準偏差
教科書組	事前	66.6	17.3217
	事後	79.4	16.5481
教科書外組	事前	65.4	20.016
	事後	76.5	15.6924

結果をまとめると

- 1 教科書サマリーでディクトグロスを行った組(教科書組)の上位者は作文能力（文法）を伸ばすことができた
- 2 両組の上位者はやさしめのリスニング問題で得点を伸ばすことができた
- 3 両組の下位者は作文において、語彙や語数（流暢性）を高めることができた

考察 1

- ・リスニングにおいては各クラスの上位者の準2級の問題でのみ、有意差が生じた。
- ・2級での点数の伸びや下位者がリスニングのスコアを伸ばすにはもう少しディクトグロスの回数が必要だったかもしれない。
- ・点数が伸びなかった要因として授業がない期間があったことも多少影響があるかもしれない。
- ・ライティングにおいて下位者で**Vocabulary**が伸びたのは、実際に書くということ、**Dictogloss**が終わった後の作業で聞き取れなかった語や書くことができなかった語を確認して身に付けていったためと思われる。

考察 2

・ライティングで、Grammar は教科書でディクトグロスを行った組の上位生徒に主効果があった。

(1) Dictoglossで聞き取れなかった箇所を教科書の内容を思い出しながら、前後関係を自分の文法力を使って考えた

(2) ペアワークでの文構築の時に文法的な説明をすることで、身に着けた文法事項を確認していくことができた

仮説で述べたように、英文の内容をある程度知っていることで、聞き取れない箇所は文法力を駆使して英文を組み立てる力を身に付けていったと考えられる。

・教科書外組はとにかく聞き取り、内容を理解することに精一杯だったと考えられる。

考察 3

・教材の違いにおいて、リスニングについては両組に有意差はなかったものの上位層のやさしめのリスニング問題に主効果が見られた。本格的なリスニング教材ではなく、教科書の要約文でもリスニング力を伸ばすことができると考えられる。

今後の課題

- 教科書サマリーを使ったディクトグロスでは上位者の作文能力（文法）を伸ばすことができたが、下位者の作文における文法、正確性を伸ばせる指導を検討していきたい。
- リスニングでは、下位者に対してやさしめの問題に正確に解答できるような取り組みを工夫していく必要がある。

参考文献

久山慎也.(2014). 「高校生の英作文力とリスニング力の向上におけるディクトグロスの効果」. STEP BULLETIN, vol.26, pp.146-158,

久山慎也.(2017). 「ディクトグロスを利用した 高校生のリスニング力を改善する取り組み」. 全国英語教育学会紀要, 28巻, pp.349-364

前田昌寛.(2008). 「ディクトグロスを用いたリスニング能力を伸ばす指導—技能間の統合を視野に入れて—」. STEP BULLETIN, vol.20, pp.149-165.

Gholam-Reza Abbasian. (2013). The Effectiveness of Dictogloss in Developing General Writing Skill of Iranian Intermediate EFL learners Journal of Language Teaching and Research, Vol. 4, pp1371-1380

Wajnryb, R. (1990). Grammar dictation. Oxford: Oxford University Press.

